

視覚から深める国語科の「フレームリーディング」

～拡大提示した教材文やノートをもとにして伝え合いを活性化する学習～

フレームリーディング 伝え合い プロジェクター 学習ノート

平塚市立みずほ小学校

〒259-1207
神奈川県平塚市北金目2-39-1

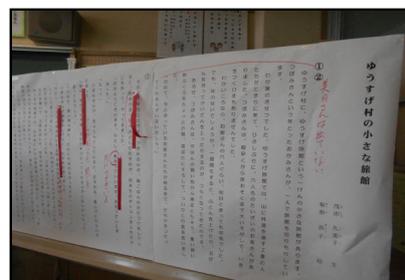
1. 研究の背景

本校は、『自分の思いや考えを進んで表現する子の育成』を研究テーマとして、国語科の授業実践を通して、子どもたちの自分の思いや考えを進んで表現する意欲や態度の育成を目指してきた(研究は3年次となる)。

本年度は「フレームリーディング」という手法に着目し、説明文と文学作品を教材として実践してきた。「フレームリーディング」とは、学習課題を工夫することで、文章全体の内容や構造をとらえる力を育てることをねらったものである。教材文を場面で区切りながら、コマ切れで読み取る学習とは異なるものである。この「フレームリーディング」で子どもたちが全文を読み取るために、教材文の全文を書いたプリントを活用することとした。

このプリントは昨年度も多く学級で活用された。プリントに子どもは自分の考えを思いついたら思いついただけすぐに書き込んでいた。そして、書き込んだことを友だちと見せ合うことで互いの読み取りを共有しようとしていた。特に小グループの学習形態がとられた時に子どもたちは、自分の読み取りを話し言葉だけでなく、書き込んだプリントを進んで見せ合いながら話し合っていた。そして「ここところが…」とプリントの叙述を指しながら考えを出し合っていたのである。言う(聴覚)だけでなく、見る(視覚)も加わることで伝え合う学びが活性化されていた。ただ、学級全体で子どもたちの読み取りを共有する場では、教材文のプリントを模造紙の大きさに拡大コピーしたものを提示し、子どもの発言にそって教師が書き加えることが多かった<図 1>。子どもたちは、教師の書き加えや、友だちの発言、自分のプリントの3つを見たり聞いたりしながら学習参加していた。

学級全体で学ぶ場面では、小グループの時のような意欲が明らかに減退していた。学習で一番大切な場面である学級全体で伝え合いながら学びを深める場面が「うまくいっていない」ことがとても多かった。これを改善する手立てをもつ必要があった。



<図 1>

2. 研究の目的

「フレームリーディング」の学習で、学級全体で学び合う(伝え合う)場面を活性化させることが本研究の一番の目的である。従来の拡大コピーの活用では、掲示された本文が読みづらく、教師が書き加えるたびに読みづらさが増し「情報過多」になり、伝え合うことがしづらくなる。しかし、子どもが書き込んだ学習ノートをそのまま拡大提示できれば、子どもたちは自分が書き込んだことを指し示しながらそのまま学級全体に伝えることが可能になる。そのために ICT 機器(とくにプロジェクター)を活用して全体の場面での視覚からの学びを具現したい。また、掲示した画像をデジタルデータとして保存することで、これまでの学習のふり返りを必要に応じて行ったり(従来は授業で書き込んだ模造紙を教室に羅列して掲示していることが多かった)、他の学級の保存データを提示することで学びを学年で共有することも可能と考え実践を試みることにした。

3. 研究の経過

本研究は「表-1」のように進められてきた。

表-1：研究の経過

時期	取り組みの内容など
5月1日	◆本研究の一年間の進め方についての協議 →この中で本校の現有および新規に導入されたICT機器の活用の仕方について研修会を実施した
6月21日	◆一回目の研究授業の実施(公開授業研究<外部から6名の参加>)※1 4年『走れ』 指導助言：白井達夫先生(横浜国立大学非常勤講師)
8月17日	◆「フレームリーディング」についての研修会 講師：青木伸生先生(筑波大学附属小学校)
11月22日	◆二回目の研究授業の実施※2 1年『スイミー』 指導助言：白井達夫先生(横浜国立大学非常勤講師)
2月3日	◆三回目の研究授業の実施(公開授業研究<外部から4名の参加>)※3 6年『海のいのち』 指導助言：白井達夫先生(横浜国立大学非常勤講師)
3月21日	◆本研究の一年間のふり返りと来年度の研究の見通しを立てる

※1と※2では「フレームリーディング」の手法について意見を述べ合った。

※3では「フレームリーディング」の手法についてだけではなく、効果的に行うために ICT 機器を活用することについても意見を述べ合った。

4. 代表的な実践

6年で「海のいのち」を教材文として学習単元をつくり、その中で「フレームリーディング」を実践した。

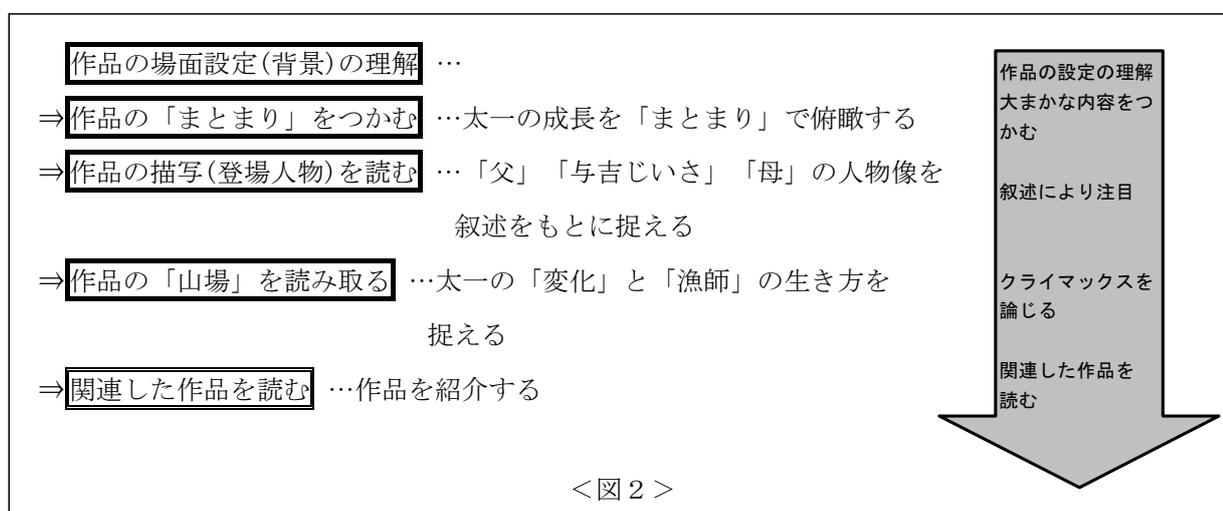
この学習単元では、「フレームリーディング」のために、(i)と(ii)を指導計画を作成する上で大切にしたい。

(i) 作品の叙述に親しんでいる状態にする (ii) 段階的に作品を読み深めていく

(i) のために、毎日の家庭学習の「音読」を本教材文できるようにした。朝の学習時間の「読書タイム」でも本教材の音読を取り入れた。まず、本教材を授業だけでなく、他のできる場で声に出して読む経験を積ませた。また、単元計画の中に、「一人読み」の時間を2回設けた。1回目は登場人物(「父」「与吉じいさ」「母」)の人物像を叙述から考える。2回目は「漁師」の解釈である。作品を読む時間をできるだけ確保する。

(ii) のために、<図2>のような指導計画の流れとした。

単元の学習課題は作品全文を通して考えていく。その際に課題は、作品の部分の詳細を読み取ることから始めるのではなく、大まかに作品をとらえる学習から始め、描写への気付き、叙述をもとにした人物の気持ちの変化の読み取り、「山場」を読み取る学習へと展開し、次第に深く読み取っていく単元計画とした。



<図2>の単元の進め方を具体的に考えたものが、<表-2>の指導計画である。

表-2：単元の指導計画

次	時	学習のねらいと活動	評価規準[]	ICT機器の活用
1	①	○全文を通読する。 新出漢字や難しい語句の意味などを調べたり、知ったりする。クエや潜り漁などの画像や動画を見ることで作品の世界をより理解できるようにする)		タブレットPCと大型モニターで静止画や動画の提示
2	② ③	○作品の「まとまり」を捉える ・内容の「まとまり」を太一の変化(成長)を視点にして捉える	◆視点をもって文章を読みながら、内容の大きな「まとまり」を考えている。 [読む]	タブレットPCとプロジェクターで全文を提示

3	<p>○「登場人物(父・与吉じいさ・母)」を捉える</p> <p>④・登場人物の人物像が分かる叙述をさがす(一人読み)(1/2時間)</p> <p>⑤・④から登場人物の人物像を伝え合いながら考える(父と与吉じいさ)</p> <p>⑥</p> <p>⑦・母の叙述から母の「変化」を捉え、「変化」の理由を考え伝え合う。</p>	<p>◆登場人物の人物像を表す叙述(会話文や行動から)をさがし、さがした叙述を伝え合う。 [読む][言語]</p>	<p>タブレットPCで書き込みながら全文を提示</p>
4	<p>○「漁師像」を考える</p> <p>⑧・与吉じいさが言う「村一番の漁師」と、太一が考えた「本当の一人前の漁師」と、終末の「村一番の漁師」は「同じなのか」「違うのか」を考える(一人読み)(1/2時間)</p> <p>⑨・⑦で考えたことを伝え合う。</p>	<p>◆作品の「漁師」の捉えを伝え合う場をいかして、広げたり深めたりしようとしている [関][読む]</p>	<p>タブレットPCで書き込みながら全文を提示</p>
5	<p>⑩○関連する作品を読み、紹介する。 ⑪<関連する作品>「いのち」シリーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山のいのち ・街のいのち ・田んぼのいのち ・川のいのち ・木のいのち ・牧場のいのち 	<p>◆すすんで関連図書を読み、本の紹介文を書こうとしている。[関]</p>	<p>書籍をデジタル化し閲覧する。</p>

本研究は、学級全体で伝え合う場面がより活性化されるために ICT 機器の活用について考え、実践することがねらいである。<表-2>では、第3次の⑦時や、第4次の⑨時が注目する学習内容となる。

第3次⑦時の授業の実際



<図3>

<図3>は授業の導入段階である。

学習課題(「母」が変化した理由を考える)をグループで話し合っている場面である。プリントに書き込んだことをもとにしながら活発に自分の考えを伝え合っている。従来もこの段階では活発な伝え合いができていた。



<図4>



<図5>

<図4>はグループでの話し合いから、学級全体の話し合いに移行する時である。多くの子どもがプリントを貼付している自分のノートに目線がいつている。

<図5>は、<図4>のすぐ後に一人目の子どもが発言した時である。発言を聞いている子どもたちの多くが、拡大提示された画像(発言した内容を教師が書き入れている)を見ている。

従来は子どもたちは、見づらい模造紙への書き込みと、自分のノートの二つに絶えず視線を動かしながら考えることをしていた。

5. 研究の成果

6年の「海のいのち」の授業研究(第3次⑦時の授業)の後の協議会では、グループで自分の考えを伝え合うときの積極的な姿だけでなく、学級全体で伝え合う場面でも友達のことを「つなぎながら」活発に発言ができていたことを多くの参加者から言われた。これを判断の拠り所にするならば、研究の目的であるICT機器を活用することで学級全体で学び合う(伝え合う)場面を活性化させることができたと言える。

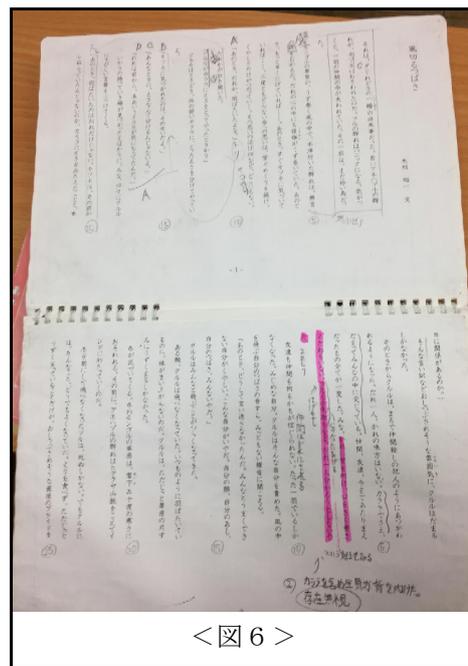
タブレットPC(iPad)の画像データを拡大提示する学習について子どもにアンケート調査とを「海のいのち」の学習の後に実施した。

「自分の考えをみんなに伝えるためにiPadとプロジェクターは役立ちますか」という質問に6年生全員(n=58)が「役に立つ(78%)」「まあまあ役に立つ(22%)」と肯定的に捉えている。

その理由の多くが「話し合っていることがよく分かる」「話し合っていることが見やすい」というものでした。つまり、学級全体で話し合う場の従来(模造紙の提示など)の方法ではなく、プロジェクターで拡大提示する学習の方が話し合いの内容が「見えやすい」のである。

実際、子どもたちの学習参加の様子をビデオで確認をしてみると、視線が忙しく動いていない。プロジェクターに投影された画像を見ることが中心で、ときどき発言をしている子どもに視線を送る程度である。

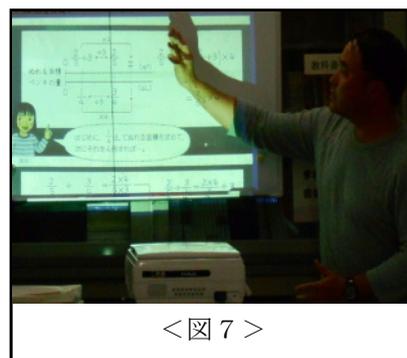
動作が減ることで、子どもたちにとって考える時間ができているように感じられた。また、考えることが授業で増えてくるとノートの記述に変化があらわれた。板書されたことを書き写すことが中心であったが、自分の読み取りを書くことが中心になり<図6>、ノートの記述内容が多様になった。教師は黒板に書くことは話し合いの要点を確認が中心となり、これまでのように逐一何かを書いているような授業ではなくなった。考えることが中心になった授業へと変化したと言える。



<図6>

6. 今後の課題と展望

本研究を立案した当初は、書画カメラ機能付きのプロジェクターと電子黒板ユニットの購入を予定していた。しかし、この一式だけの購入では学校の中で頻繁に使われる状態はなり得ないだろうと考えた。また、本年度は市からプロジェクターとタブレットPCとタブレットPCと無線でつなぐ機器がそれぞれ3台新たに導入されICT機器の環境が変化した。そこで、本校で既に現有しているものと合わせて、各学年でプロジェクターとタブレットPCと無線機の一式がそろそろように本助成金を活用することとした。これにより各学年が同じようなICT機器の活用ができる環境をつくることができた。学校に1式だけの状態より、使いやすさが格段に上がった。本研究では、学級の枠にとどまらず、他の学級の授業データをいかして学年全体で学びを深める試みを実施した(6年「海のいのち」の教材で登場人物の人物像を考える学習で読み取りを2つの学級で比較した)。一つの学級だけでは気づかないことを取り上げて学習することができた。このようなICT機器を活用するメリットを教師が共有し、積極的に授業で活用され実践を重ねて行くこと必要がある。校内でOJTを継続的に実施してきたのもその理由からである<図7>。しかし、実情はまだまだその段階には至っていない。今後の課題として、話し合う場面を活性化するためにICT機器を一つのツールとして効果的に活用できるような本校独自の「型」を学校全体でつくっていくことが今後の大きな課題となる。



<図7>

7. おわりに

実践の推進者が中心になって、「継続的に」具体的な実践を通して研究にかける思いを伝えなければならないことを切に感じている。性急にICT機器の活用を求めるのではなく、「使いたくなる気持ち」「使える環境」がなければ定着はしていない。幸運なことに本年度に助成金をいただきながら研究を進めることができたが、研究はまだスタート段階で、これからが実践を深めていく段階と考えている。

横浜国立大学の白井達夫先生と、筑波附属小学校の青木伸生先生には本研究について多大なご協力をいただいた。感謝を申し上げたい。

8. 参考文献

- ・青木伸生(2013)『「フレームリーディング」でつくる国語の授業』東洋館出版社
- ・広島県府中市立国府小学校(2015)『「フレームリーディング」でつくる国語の授業』
東洋館出版社